

松下幸之助氏 松下語録より

8月31日付け読売「編集手帳」を読んで、今まで心に留めていた松下語録を整理してみました。

風雅な茶会の席に緊張が走ったという。京都仏教界の重鎮、立花大亀(たいき)老師が松下幸之助氏を面詰した。「君のおかげで、こんなに心がなく物ばかりの嫌な日本になってしまった。君の責任で直してもらわねばならん。」◆1975年(昭和50年)秋のことであると、同席していた博報堂社長(当時)の近藤道生さんが『茶の湯がたり、人がたり』(淡交社刊)に書いてある。松下氏は温容を崩さぬまま、じつと考え込む様子だったという◆国家経営の人材を育成するべく「松下政経塾」を創設するのは、それから4年後のことである◆第1期生の野田佳彦氏(54)が新しい首相に指名された。大亀老師が嘆いた「心の不在」はそのまま、政権交代後の鳩山、菅両内閣が国民の信頼を失ってきた原因でもある。野田新首相が双肩に担う責任は限りなく重い◆松下語録に、「客の好むものを売るな。客のためになるものを売れ」という格言がある。子や孫の世代に借金漬けの苦しみを押しつけることのないよう、増税など国民の好まない政策も避けては通れない。「経営の神様」が野田氏のために残したような言葉だろう。

- 失敗することを恐れるよりも、真剣でないことを恐れたほうがいい。
- 一人前の商人になるまでには二度や三度は小便が赤くなる経験をするものだ。
- 知識なり才能なりは必ずしも最高でなくてもいい、しかし熱意だけは最高でなくてはならない。
- 経営は生きた総合芸術であるともいえる。
- 体は休息させたり、遊ばせたりしてもいいが、心まで休ませ、遊んでいるということであってはならないと思う。心は常に働いていなくてはいけない。
- 自分には、自分に与えられた道がある。
広い時もある。せまい時もある。のぼりもあれば、くだりもある。思案にあまる時もある。しかし、心を定め、希望を持って歩むならば、必ず道は開けてくる。深い喜びも、そこから生まれてくる。
- 私は、失敗するかもしれないけれども、やってみようというようなことは決してしません。絶対に成功するのだということを、確信してやるのです。
何が何でもやるのだ、という意気込みでやるのです。
- 指導者は才能なきことを憂う必要はないが、熱意なきことをおそれなくてはならないと思う。
- 以前、どこかの会社の社長が、知恵ある者は知恵を出せ、知恵無き者は汗を出せ、それも出来ない者は去れ、と社員に言っていたことがある。
松下はその言葉を聞くと、「あかん、つぶれるな」と言った。「本当は、まず汗を出せ、汗の中から知恵を出せ、それが出来ない者は去れ、と、こう言わんといかんのや。知恵があっても、まず汗を出しなさい。本当の知恵はその汗の中から生まれてくるものですよ、ということやな。
- 人には燃えることが重要だ。燃えるためには薪が必要である。
薪は悩みである。悩みが人を成長させる。
- 誰でもそうやけど、反省する人は、きっと成功するな。
本当に正しく反省する。そうすると次に何をすべきか、何をしたらいかんかということがきちんとわかるからな。
それで成長していくわけや、人間として。

